

<その他>

地域の古老に学ぶ

—— 激動の歴史を生きて、93年 ——

水寄令子 長野県立丸子実業高等学校非常勤講師
角尾篤子 信州大学教育学部生活科学教育講座

Live in Harmony with my Neighbors, Friends and Relatives

MIZUSAKI Reiko: Maruko Jitsugyo Senior High School

TSUNOH Atsuko: Living Science Education, Faculty of Education, Shinshu University

Yoneko was born on May 16, 1907, when her mother was forty-five years old. Her family had been "Shoya", a leader of the farmers, for generations, so her family was rich. She had four elder brothers and one elder sister. Yoneko's father was a person living for pleasure, a prodigal son. He was good at Japanese dance and accompanying "Gidayu" reciter with the "Shamisen". On the contrary, her mother had to work hard with their workers and her mother-in-law. When she was twenty-four years old, she went to Taiwan where her 43-year-old sister lived, and got married at the age of 28. When Japan was defeated during World War II, the happy times ended. In 1947, at 40 years old, she ran away to Japan with nothing. She lived a hard life for about fifty years.

[キーワード] 口述 明治気質 女性の生活記録

1. はじめに

今の時代は、地域の共同体が家族を支える力が弱まっている。戦前の大家族は激減し、そのうえ核家族も崩壊しつつある。又、一方的に情報を発信するマスメディアが発達しているので、子供達がじっくりと生き方を考える時間を奪われ息が詰まる生活を強いられている。しかし、過去においては今より、もっと多くの社会の激変があったはずである。

にもかかわらず、子供も大人も満足と幸福感を持っていた。幸福になるための良きヒントを得るために、過去における一般的な普通の女性の生涯を調べる事により、家の有様や親子、地域への関わり方を検証してみたい。今回は、明治、大正、昭和、平成と生きてきた女性の生活の記録が無かったので、来月94才になる明治40年生まれの、竹重米子さんの

口述を文字にして、誰の眼にも止まるようにしたいと考えた。

2. 口述内容

2.1 父と母

代々、養蚕の種屋と庄屋で多くの田畑を持つ家だが、中々跡取りが生まれなかった。祖父は願をかけた。明治26年には機関車が上田駅から上野まで運転されたがその当時(敷)には無かった。小県郡神科村山口(現上田市上田)から一週間歩き、東京の日本橋まで行って、50cmもある男のお人形を買ってきた。その翌年、男の子が産まれた。その一人息子が父だが、働くのが嫌いで三味線をひいたり、遊ぶ事が大好きな人だった。子供に世話を焼く事は無かったけど、夜帰って来ると家の中でおしっこするの。その便器を、私や母が片付けるの。寒いからといってね。嫌だったけど、私も年をとったらそうなるのかな、と思いつながらやっていた。

母は、「山口で一番好い男で、お金持ちの一人息子で、あなたは幸せね」と言われて、嫁にきたらとんでもない人だった。「こんな仕事しないお父さんなら、出てっちゃえば良かったのに」と言うも母は、「その分お婆さん(姑)が、とっても良くしてくれたの」と言った。でも、日に一枚の着物を縫えて、弟子を20人も抱えていた祖母も80才になると、寝たきりになった。「水をくれ」と言うので、私がお水をあげると母が「やっちゃいけない」と怒るの。何でか解らなかつたんだけど養蚕が忙しくて、おしめを替える回数が増えるからだったと思う。子供は飲みたいだけたくさん、あげちゃうからね。

父はその頃、中町(現海野町)に大きく足袋屋(職人が10人)をやっていた親戚にお金を投資していて、その店が倒産して大金を失った(5才の時お役所から人が来るという訳で大人たちが、右往左往して何かを隠していたようだった。)

2.2 尋常小学校

母が年を取っていたので(50代後半)参観日に気を使った。「お歯黒(鉄お茶に浸して、酸化された液)をきれいに付けてきてね。着物は、重ねてきてね。」 当時は、口紅を塗らずに歯を黒くする事が美しいとされた。着物のえりも色違いで重ねがおしゃれだった。参観者は、いつも決まった人達で5、6人だった。母は前の日にいろりに鏡を置きお歯黒をつけた。

尋常4年まではそうだが、6年頃には白い歯が流行ってきて、今度は、良く磨いてきてと言うようになった。普段はカリントウを食べたり黒アメ(鉄砲玉と呼んだ)を食べた。

遠足の時だけドロップを買ってもらい、溶けないように大事になめた。

2.3 女学生時代

高等科、実科女学校本科2年を卒業した後、師範学校へ行って先生になりたかったけれど、家庭の事情が許さなかった。小学校の時、跡取りの兄(3期)が30才の若さで亡くなった生後3ヵ月、3才、5才の娘を残して。 当時の授業料は、実科は1ヵ月1円50銭、女学校は1ヵ月3円50銭で、お金はあったんだけど、人手が無かったから女学校へ行かずに家事を手伝うように言われた。兄さえ元気だったらソメヤ(染谷丘高等女学校)へ行きたかった。夕方、1人おんぶして、2人の子の手をひいて散歩に出て土手に登るとソメヤ

の寄宿舍の屋根が見えるの。時間がくると、電気が一齐につくの。その明かりを見ると、何故だか判らないけど涙が滝のように出てきて困った。

でもね、私は家にいらただけ良いほうだったの。当時は、高等科へ行ける人は3割で女学校は1割以下だった。ほとんどの人は小学校卒業後は、製糸工場か子守に出された。

2.4 卒業後の青春時代

長兄は千葉、次兄は亡くなり、4番目の兄は私と9才も離れていたのだから東京の鉄道学校（鉄道員中央講習所の軌?）へ行っていた。19才上の姉は、私が6才の時に台湾へ嫁いでいった。

義姉さんは、早くに兄(3男)に死なれて、農業や稼業（種や）を女性2人作男1人と共に大変、身体を使って苦労した。私は子守と家事を母と一緒に頑張った。

3人の姪達を「父のいない子だから、と言われないように近所の子に負けないような子に育てよう。」と、母と相談しながら大変気を使って育てた。3人共、とても思いやりのある良い子に育ってくれた。その後、長女が亡くなって、又、三女が養子を迎えて、跡取りでやっていたが、子供も無く、その養子が亡くなってしまった。今、姪は広い家の中で一人で暮らしている。次女夫婦が、近くに来てくれるので安心だ。男が弱くて困る家だ。

仕事は、米を収穫した後、モミをネコ（筵の大きい物）の上へ広げて干す。炎天の中で母と二人で寝転がって話をした。「あ～あ、我が家も貧乏になったもんだ。広い田畑持ってもやる人いないから切り売りして食べてるんだものね。身体はらくになったけど寂しいわい。」そのうちに、もっと貧乏になって1斗（10升）買いするようになってしまった。父も年をとって、遊ぶ元気もなくなりネコを機械で編むようになった。庄屋が、こんな風になってしまった。大黒柱がないと家はどんだめになっていくんだね。

楽しかった思い出は蚕糸専門学校（現繊維学部）の学生がよく遊びにきたこと。4、5人で連れ立ってりんごを近所へ買いにくる。小売の行商の人に売ってしまった残りを買うんだけど、待っている時間を、「家へお入んな。」と母が連れてきてしまう。私は、男の人と口を聞いたことがなかったから恥ずかしくて「お母さん、家へあげないでよ」と言うんだけど、母は「ウチの子もタビ（他の県）に行ったら良くやってもらいたいからしてやるだに。」と言っては、私の大好きな柿を全部取らせてしまったので、私は、学生に「まーで、しゃら好かない」と言った。母は笑って田舎焼き（おやき）を作ってもてなした。

学生は、10銭の飴をおみやげに買ってきては、毎日のように来て遊んでいった。

2.5 台湾へ（20代～30代）

私が適齢期になると、早く結婚しろと言われたが、「大丈夫、私は結婚しないで働くから」と、元気に返事していた。なぜか忘れたけど、台湾へ遊びに行ったの。

19才年長の姉が台湾にいたので、上田駅から神戸へ行き、船に乗って行った。台湾では軍医をしていた義兄と姉の家で、甥達とのんびり暮らした。そのうちに28才になってしまった。「もう子供が2人もいてもいいような年だね。」と言われて、1才と4才の男の子がいる人を世話された。夫は善い人で選んでもらってうれしかった。姑が、亡くなった前の奥さんの事を口にするのが思いやりに欠ける人だと思って悲しかった。でも、子供達は

とっても可愛くて、1才の子は初めから良くなついで、自分が産んだ子のようにだった。

台湾では、日本人は皆、楽な暮らしをしていて、「台湾ボケ」している人が多かった。雇い人が2、3人いて、食事、掃除、子供の世話まで台湾の人にまかせて何も昼間やらずにおしゃべりして遊んでいる人が多かった。私はポーッとされてられない質なのでお掃除だけやってもらって、食事（日本食）と子供の教育は自分でした。官舎は五部屋もあり大きな木が植わっている広い庭があり、お手伝いさんが二人いた。「奥様然」としていなかったので台湾の人に親しまれて、「自分を使ってくれ」と言ってくる人がたくさんいた。

官舎には、沖縄出身の人もいて、言葉が通じないこともあったが、他県の人達と仲良く交際した。敗戦になり、昭和22年、台湾から日本人が追い出された。田辺港に着いた。

2.6 戦後の混乱

(細岬)

全ての財産を台湾へ置いて裸で帰国し、そこへお姑さんも加わり、五人が、山口の実家へ身を寄せた。納屋でも良いと思ったが、お座敷（客間）で住まわせてもらった。大勢でお世話になって迷惑をかけるので一生懸命借家を捜した。跡取りの三女がちょうどお婿さんを迎えたばかりで気兼ねをさせて、特に迷惑をかけてしまった。水汲みが大変だった。

今の住まいを借りる事ができた。鈴木さんという一人息子に戦死されたおばあちゃんが一人住まいだったので一緒に住むことになった。台所も一緒に使っているうちに、食事の支度もしてあげるようになった。「娘と一緒に暮らしているようだよ」と喜ばれて姑さんとおばあちゃんと二人の面倒をみさせてもらった。

姑さんは、宗教やっていたのでお祭りの時やら、いつもお客さんが多かった。私は入信するつもりは無いから隣の部屋にいた。時々「こっちへ来て一緒に食事しましょう」と言われるから、別に断る事もないから一緒にいただいて、「ごちそう様」と言って、又隣の部屋へ行ったら、縫い物をしたり片付け事をしていた。そのうち姑さんがだんだん弱ってきた。夜中の決まって一時半になると「よねこさーん」と呼ぶ。廊下へ行くといろいろ出ちゃって、それを自分で始末しようとするから、なおさらひどい状態になっているの。

一言「悪かったね」と言ってくれればいいのに「申し訳ない」と言っていばっていた。毎日「片づけるのは、私の仕事だから、出たらそのままにそっとしておいてください。」と、夫と二人で繰り返して言っていたら、そのうちにいじらなくなった。

2.7 子供の教育

男の子二人育てたが、教育をどこまでつけさせたらいいのか悩んだ。学校で教わった事は時と共に忘れるものだ。社会へ出てから本気で勉強したことが実際に役立っている。大学を出たから、頭が良いのじゃなくて、出た後でどんな勉強をして社会の中で役立てているかが大切なの。長男は、大学の先生を退職した後も勉強している。次男は、高校の先生として63才で亡くなるまで勤めた。男の子は無茶をするから学校へあがるまでは良く見てあげないとね。「親のいない所で遊んでればいいや」という気持ちで育ててはいけないわね。滑り台が危なかった。人の世話もいいけど、まず、自分の事を良く見ておいてから人様の面倒を見るように」といつも子供達に言ってきた。

2.8 夫の介護をしながら

お姑さんを看取った後、東京勤務を数年していた。岩村田の税務署長で帰ってきてすぐに夫は脳溢血で倒れてしまった。その時は、私は他人の面倒を見るために生まれてきたのか、と思った（夫は、それから17年と10日、床にいて亡くなった。）。

でも他人に看られるよりは、丈夫で見てあげられる自分の方が幸せだと思っている。

もし、自分がお便所へ行けなくなったら、病院へ行くわ。自分がいやだと思ったことは他人にもやらせたくないから。それを「仕事」と思っている人にやってもらいたい。

60代、70代は、「やだ」と言えない性格なので、人に言われてやれる事はやってあげようと努力してきた。町の役や連合婦人会議で小諸市までよく出掛けた。縁談のお世話もよくやった。自称「交際家」で、機会があれば、誰とでも話してみようと思った。

今は、長男は東京に所帯をもっていて時々電話をくれる。姪の娘を次男のお嫁さんにもらった。家を新築し、やっと次男と暮らせると思った矢先死なれてしまい、お嫁さんと二人になった。でも、お互いに自由に干渉しないように暮らしている。食物も残すともったいないから1食だけ作って、余った分をもらうからと言ってもたっぷり作ってしまう。

最初からお年寄りと一緒にだと、嫁姑の間に「思いやり」が育たないわね。若い人達にもいろいろと経験させてみて、初めて、お互いを尊重してつきあえるのね。

お互いに、自由に人とおつきあいしていくのが良いわね。普段から人とできるだけ交わって協力して固めておかないとね。上田市というものを固めておかないと、コトがあった時、ぱっと集まらなくちゃいけないよね。実際には、明治から平成まで時代の流れが早すぎてついていけない事もある。

ある程度の自由は必要だけど自由過ぎるのもいけないと思う。人生は、決まっているんだから、その人はその人なりに生きてけばいい。明治は明治らしく生きていく。「私達はこうだった」と押付けてもいけないし言いたくもない。むしろ、若い人がしっかりやっているところを見せてもらいたいもんだ。昭和は、昭和なりにやっていくのが良いんだよ。

自分をもって、遠慮したり、負けたりしてかなきゃいけないのよ。やだくも我慢してくださいよ。いつか必ず報われる時がくるよ。

私はこの土地を、大家さんのお婆ちゃんが最後に長野に嫁いだ娘さんの家へ行かれる事になった時、「家をあげる」と言われたんだよ。娘の様だといってね。そういうわけにもいかないから、買わせていただいたんだけどね。本当にうれしかった。その後、次男夫婦と住む事になって、次男の同級生が設計してくれてこんなに良い家が建った。建ったとたんに次男が仕事先で亡くなってしまった、63才の若さで。この運命だけは「どうして?」と思ってしまって、なかなか受け入れる事ができなかった。

でもこう考える事にしたの。年寄りの私に最後に「こんな良い家を作ってくれたんだ。私は、次男に良い家を作ってもらった事に感謝してれば良いんだ」と。

今は、お嫁さんと二人で気楽だし、実家の姪達もよく来てくれるし、お友達もたくさん来てくれる。私が子供の頃には考えてもみなかった程、今は豊かで本当に幸福だと思う。

3. 考察 — 昭和は昭和なりに生きる —

敗戦から9年後に生まれた私にとって歴史を学ぶ事は自分の幸福をかみしめる一時でもある。まず第一に、望まれて生を受け成長過程においては病気の時は適切な治療を受けられた。第二に、望めば公的な学校が多く用意されていて教育を受ける事ができた。第三に、女だからという理由で取れない資格はほとんど無くなっている。昭和10年の女の28才はすでに晩婚の域に入っていた。米子さんはこの半封建社会の中で次々とせまる問題に対しそれを運命ととらえ、我慢して生活を続けてきた。娘時代は生家を支え、嫁しては子を育て、姑を看取り、夫を17年も介護し一家を支えてきた。彼女は「これは私の仕事なんだ」という確かな信念をもっているのだから迷いが無く生活をしてきている。今もなお、物事に対して前向きで、大変魅力のある女性で、周囲の人を元気にする力を持っている。

昭和20～30年代に生まれた私の世代の親は、大正に生まれ、明治の親の教育を受けている。母達は、米子さんのように、娘時代から自分の考えを主張することも無く親の意向のままに従い、自分を律してきた。しかし、自分が親になった時には、娘達に、結婚するまでの娘時代だけは、大きな自由意思を認めている。その一つに自分達が与えられなかった高等教育を受けさせている。しかし、結婚後の生活は自分達と全く同じ「お家第一」でやるように教育している。私の世代は、一度得た「自由」を、結婚によって失うというギャップに悩むあまり、未婚のままだったり中年離婚に至ったりしている。一方、戦後生まれの母を持つ昭和50～60年代の若者は欲しいものは何でも手に入る時代に育ち、自分の存在価値を見失ってしまうような悩みをもっている。家族の形態も今と大きく異なるものになるだろう。昭和生まれの私が願う事は、今の子供達が人生の後半で幸福感を持てる人間に成長していく事である。その方向を自信を持って示していきたい、昭和生まれなりに---

明治の祖父母、大正の父母を持つ昭和の自分は、昭和気質を守って次世代に語っていきたい。又、次世代の心意気を聞かせてもらいたい。

「人と争わず、自分の考えはしっかり持っている事が大切。言っても解らない我儘な人は、可愛そうな人だと思えばいい。ずっと願っていれば望みはかなう、そう思いながら、90余年を過ごしてきた。」この考えは昭和の私も大変共感する所である。

今回、友人の協力によって、明治気質を貫いてきた女性を直に知ることができて、今後の生き方に勇気を与えられた。60代、70代は何をしていたかを聞くと「えー、飛びまわってたわね。」と元気な返事が返ってきた。

4. 参考文献

- 中野 卓 (なかの たかし)、1977、口述の生活史、お茶の水書房、東京都
山岸 正幸、1980、上田いまむかし、(株)郷土出版、長野県

(2000年3月31日 受付)